

掌てのひらに託されし願い

〈長野県〉川手弓枝かわて ゆみえ 42歳

トミさんは、学生最後の実習で
出会った末期がんの患者さんだ。体

調が良い日は車いすで散歩をして、
一緒に山を眺めた。自宅があるあ
の山の向こうには、トミさんの人生

が詰まっている。旦那さんが生きて
いたころや戦時中の話など、大切な
思い出を聞かせてくださった。人生
の大切な宝物を分けていただいた
気がして、感謝の気持ちでいっぱい
になった。

病状が進行し、トミさんは今日
が何日なのか分からない時が増え
た。そこで、カレンダーに貼り替え
可能な印を付けて、今日が何月何
日か分かるようにした。実習最終
日、トミさんはずっと泣いていた。国
家試験に合格したらお礼に伺う約

束をすると、「来てくれるのをずつ
と待っている」と言っていた。と
た。「合格発表の日はいつだ？カレ
ンダーに印付けてなあ」と、うれし
そうに頼まれた。

再び実習先を訪れたのは、奇跡
の合格から一週間後。看護師長さん
から、トミさんのカレンダーにある
印は何かと尋ねられた。ご本人の
希望で、合格発表の日に印を付け
た経緯をお話した。師長さんはひ
どく驚き、「その日、トミさんが亡
くなったの。前から悪かったのに、そ
の日まで頑張っていたんだね」と涙
した。一生分悔やんでも、トミさん
にお詫わづらびする術が無い。患者さん
と、一日二日が貴い時間であること、
共に過ごす時間はかけがえのない

ものであることを、胸貫く痛みと共
にトミさんが教えてくださった。

山の彼方かなたを見つめるトミさんが、
「帰りたいなあ」とつぶやいたこと
があった。まるで願いを込めるか
のように、ギョツと私の手を握った。託
された願いが、私の掌に宿った瞬間
だった。この時からだ、患者さんが
望む場所で最期を過ごせるような
看護をしたい、と考え始めたのは。
掌に託されし願いは、目指す看護
の原点になった。時が経ち、地域・
在宅看護を専門領域とした。在宅
療養される方の貴い時間とかけが
えのない日々と向き合い、「ありが
とうございます」と感謝申し上げ
ている。